

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

濱谷浩のインスピレーションを方位づけた人物：
渋沢敬三

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 雅樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009306

濱谷浩のインスプリレーションを方位づけた人物 洪沢敬三

近藤雅樹
Kondo Masaki

生涯にわたり、人間の営為と天空大地を撮り続けた不世出の写真家、濱谷浩を魅了したひとりの人物がいた。洪沢敬三である。その出会いの様子を、濱谷自身が自著『潜像残像』(1)に、次のように書き残している。

私が尊敬してやまない人は第一に洪沢敬三先生であった。一九三九年はじめてお目にかかって以来、私は私なりに先生を尊敬し、いわせて頂くなら、私のその後の生き方に大きな影響を与えて下さった。もし先生にお目にかかることがなかったなら私の写真も大きく変わっていたにちがいない。

アチック・ミュウゼアムで何度目かにお目にかかった時、次の日曜日に邸宅の方に遊びに来るようにとのお招きをうけた。公私共に御多忙の日常のところ、私みたいな若僧のため時間をさいて下さるのは恐縮とは思ったが、喜んでお邪魔させて頂いた。

洪沢の「人心掌握力」

この時、挨拶に続いて「音楽は好きかと聞かれ」た。洪沢は、巷の人たちの姿を無我夢中に撮り続けている青年に、写真やカメラの話ではなく、音楽の趣味を問うた。意表をつかれたのだろう、濱谷が残した次の一文によって、私は、洪沢敬三の人心掌握力の真髓に限りなく近づき手がかりを得た。

ここにいう人心掌握力とは、手練手管の駆け引きではない。駆け引きであ

れば、いつかはどこかで破綻する。そうではなくて、無私の心から発せられる慈愛、親愛の情であり、天賦の才というほかはない人望である。見習いたくても、とてもではないが、容易に修得できるものではない。

さて……、催眠術にかかったような面持ちであったのだろう、問われるままに濱谷は言った。

「ベートーベン、バッハ、チャイコフスキー」。

先生は御自身でレコードを選曲され、ベートーベンの「運命」をかけて下さった。先生はその曲の楽譜を膝の上に開いて、譜面を目で追っていられたのが大変印象的で、いまでも私の目に映る。

レコード演奏が終わり、次に案内された書齋で膨大な蔵書を目のあたりにした濱谷は、さらに幻惑される。虜になった。

日曜日の午後おそく洪沢邸を辞した。暮れかかる麻布二の坂を降りながら、私の道が長く幅広い坂道を登りだしたような気になっていった。

濱谷が「麻布二の坂」と記した坂道は、港区三田の「日向坂」を西に向かい、古川(渋谷川)にかかる「二の橋」を渡って現在の地下鉄「麻布十番駅」に至る間の数分間を歩く、ごくゆるやかな坂道のことである。

往年の洪沢邸は、第二次世界大戦直後、幣原喜重郎内閣のもとで大蔵大臣をつとめていた洪沢敬三が、自ら財産税として国庫に物納した。以来、各省庁の共用会議所として利用されていた。半世紀余にわたり大蔵省が管理していたが、洪沢家の執事だった杉本行雄が粘り強くはたらきかけ続けた結果、払い下げが叶い、杉本が経営する古牧温泉の敷地内（三沢市とおいらせ町にまたがる土地）に移築した。今から二〇年ほど前のことである。今日、洪沢邸の跡地には、新築した三田共用会議所の建物が建っている。

濱谷がはじめて洪沢邸を訪れた日に帰路に着いたその坂道を、私は、以前から何度も歩いてきた。私自身が、洪沢敬三が邸内に設けた「アチック・ミューゼウム」の後身である（財）日本常民文化研究所に、三年間ほど籍を置いていたからである。〔2*〕

「二の橋」を右折すると、ほとんど高低差を感じない。それでも、麻布十番温泉あたりから南を望むと、古川をはさんで洪沢邸跡が三田の高台にあることが明らかにわかる。くりかえし引用するが、だから、濱谷は「暮れかかる麻布二の坂を降りながら、私の道が長く幅広い坂道を登りだしたような気になつていった」と、記したのである。

今回、あらためて洪沢敬三のご令嬢をお訪ねした。

「こども心にも、いろいろと覚えております」と、そのような口調で語りはじめてくださった黎子さんは、懐かしげな表情だった。

「父の亡くなった後も、濱谷先生は、法事の折などに、ふいっと、来られましてね、テントを張って仕度している時とかにです。それから、私たち家族が一緒にいるところなどを、よく撮って帰られました。今になって思うと、こんなにご立派な方に撮っていただくなんてと、ちよつと、とまどうようなこともあつたりして……。直接、お便りもよくいただきました」

濱谷は、洪沢敬三が主宰していたアチック・ミューゼウムをたびたび訪れていた。その何度目かに、アチック・ミューゼウムの主人を紹介される機会を得たのだった。洪沢敬三に濱谷を紹介したのは、アチック・ミューゼウム同人の民俗学者、市川信次だった。当時、市川は「高田警女」に強い関心を抱いて調べていた。じつは、濱谷がはじめてアチック・ミューゼウムを訪問し



渋沢邸の庭を歩く渋沢一家。写真左から長女の紀子、妻の登喜子、次女の黎子、敬三、長男の雅英。東京・三田綱町で。〔撮影：1939年〕

たのも、彼女たちに取材した写真を市川に届けることが目的だったのだ。

「日本常民の心」を写す

『雪国』は、濱谷浩の処女出版となった写真集である。一九五六年に毎日新聞社から刊行された。「越後」と「桑取谷」の二部構成だが、主題は、一九四〇年以來、一〇年間、欠かさず通い続けた新潟県中頸城郡谷浜村字西横山（現在は上越市内）における、小正月前後の行事に取材した写真記録だった。取材・撮影は、市川信次の指導のもとに進められた。

市川信次との出会いも劇的だった。

一九三九年一月、濱谷は越後高田へ陸軍高田連隊スキー部の雪中行軍取材に出かけた。その折、取材のために投宿した駅前旅館の隣にあったパン屋兼喫茶店に入った。そこで、マスターの大島保という東京帰りの青年から紹介されたのが市川だった。そして、市川と濱谷は、出会うやいなや、意気投合してしまった。

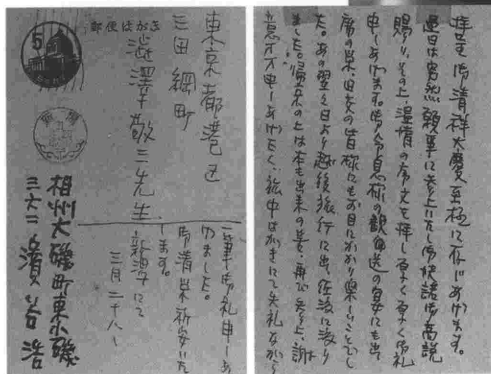
市川さんは民俗学を研究されていて、今夜の夜行列車で上京し、数年間、渋沢敬三先生の主宰しているアチャック・ミュウゼアムのメンバーとして研究生活をするとのことだった。東京で交わりを深めようと約束し、短い時間に多くのことを忙しげに話しあった。そのとき、高田の「警女」をぜひ撮っておいてくださいと紹介された。私は高田駅に行き、固い握手をし、夜汽車の窓に微笑を浮かべる文学青年の面影を宿した市川さんを見送った。

雪国での、市川信次さんとの出会いで、私は始原的な日本及び日本人の現実にアプローチすることになる。

夜行列車に乗り込む直前だった市川信次との、この気ぜわしい邂逅が、濱谷浩という民俗写真家の誕生を決定づけた。高田での取材を終えて帰京した濱谷は、早速、市川との再会を果たすべく、現像したばかりの「警女」の写真を携えて、渋沢邸内のアチャック・ミュウゼアムに赴いた。そして、今度は



応接間を兼ねた第二書斎で書物を展げる伊沢敬三。
東京・三田綱町の伊沢邸で。[撮影：1939年11月]



濱谷は、写真集「雪国」の序文を伊沢敬三に書いてもらい、その返礼を葉書に記した。

[1956年3月28日付]伊沢史料館蔵

伊沢の知遇を得ることになったのだ。

戸数二十五軒。この小正月の行事を、私のカメラで民俗学の方法論で記録するのが目的だった。市川さん旧知の折り目切り目の正しい笠原彦兵衛さんの家に世話になり、ここで、民族の生活の古典ともいえるべき農耕儀礼の民俗行事を見ることになる。〔3〕*

『雪国』の上梓に際しては、題字を堀口大学が揮毫し、伊沢敬三が「序」の一文を寄せた。そして、刊行後に時を経ずして出版祝賀会が催されたのだ。発起人代表が伊沢であったことは想像に難くない。会場は下谷の「笹の雪」。参集したのは伊沢敬三、堀口大学、市川信次、そして木村伊兵衛ら。後に紹介する伊沢敬三の著書「犬歩当棒録」には、このときの「序」が「濱谷浩著 雪国跋」と題して収録されている。そして、濱谷浩と朝夫妻を上座に据え、伊沢が祝辞を述べている写真も掲載されている。

「序」の冒頭に、伊沢は次のように記した。

高田の市川信次さんに濱谷さんを引き合わされてからもう二十数年になりますが、昭和七八年頃、私は龍門社企画の日本実業史博物館の資料蒐集を担当して居た関係から、他の資料に併せて、その頃既に消えかかって居た音による街頭公告、たとえば錠斎やデイデイや羅宇屋等の姿とか、近郊の各種の市日の賑わいの情景等を多数撮影記録することを思いたち、濱谷さんの労苦を煩わしたことも度重なりました。

その頃から濱谷さんの民俗学的視野は広まり、同時にわが国常民の生活様式を単に撮影記録するに止まらず、民族に潜む悠久な歴史を通じての個人個人、及び集団に受け継がれた「日本常民の心」を汲みとってこれを写真に表現せんとする意念が強く抱かれ初めたようです。

この一文によって、私たちは伊沢の慧眼けいがんをよみとることができると言える。「日本常民の心」ととらえること。伊沢は、濱谷にそれを要求したのだ。心を汲みとつ



荷車に水道器具やゴムホースなどを積み販売。[撮影年不明]



野菜を担ぐ女性の行商。[撮影年不明]

写真に定着させること。しかも「音による街頭広告」の記録を残すためという、注文までつけて。「濱谷にならできる」という確信があったのだろう。「音楽は好きか」と聞かれたと、濱谷は書き残していた。これは、想像の域を出ない私の想念なのだが、今に至っては、意味深長な問いかけだったのだと思えてならない。渋沢は、市川信次から濱谷が撮影した「警女」の写真を見せられていた。その時、濱谷が撮った写真の中に、はっきりと「音曲」を聴いた。そうに違いない。だから、濱谷を書斎に招いた。なぜか。音を撮らせるために、である。

街頭商いと店頭看板

渋沢敬三の著作のひとつに「日本広告史小考」という論文がある。〔4*〕もつとも、これは、表題に添えて「電通主催夏期大学講演 昭和三〇・八月」という記載がある。また、文末にその「特別講演の要領筆記である」とも付記している。そのためなのだろう、話口調だったものを「である」体に統一した文体は生硬である。残念ながら、渋沢らしい流暢な筆致は味わえない。しかし、広告とは何かと問いかけるその内容は、すこぶる濃密である。そして、この講演筆記録には、濱谷の撮影になる写真が多く紹介されている。その中には、本書に収録された写真もあった。それらを「日本広告史小考」に掲載された順にしたがい、列記しておく。ちなみに「」内は「日本広告史小考」中の写真説明文である。また▼の数字は、本書のページ番号である。

印章看板「幽石堂竹腰印房」

〔模型看板 於名古屋(昭和14、5年)以下一連の広告例(実物、模型、音等は)

濱谷浩氏を煩わし東京、名古屋等各地で撮りしもののうちから2、3を示す〕▼108

焼印行商

〔実物展示の例 焼印行商。今は焼印を捺す対象も尠なくなった

(昭和14、5年、浜谷氏作)▼121

門付け

〔かどづけ音の広告〕▼84



卯月焼印店。大八車を使つての街頭販売。〔撮影：1939～40年〕

屋台部分

「らうやの屋台細部（浜谷氏作）」▼101

館売り屋台

「館やピッコロなる喫茶店のとなりに半弓場広告の幟が見える。半弓の如きは現今は見当るまい（浜谷氏作）」▼099

同上、館売り屋台の細部

「館やの屋台細部（浜谷氏作）」▼100

古物商

「古物商店先実物展示。偶然田中栄八郎氏の写真があった（浜谷氏作）」▼048—049

洪沢敬三は、市川信次から濱谷浩の撮影した写真を見せられた時に、いたく感動を覚えたのだと推察してよいと思う。

国文学研究資料館に残る「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」の中に、濱谷と洪沢の信頼関係を示す貴重なデータが残されていた。同資料館の青木睦准教授が中心となり整理されたアーカイブス資料の目録によると、洪沢の依頼に依って濱谷が撮影し、届けた写真入の封筒に、いろいろとメモ書きされているものが確認されている。一例として「自転車による掃除道具売」という写真のデータを紹介してみよう。

これは「1939年5月10日午前10時30分 大掃除当日。新橋附近」とあり、撮影記録であることが判明する。他にも、写真をおさめた封筒に「経済史博物館資料『音に依る広告』写真 撮影者 濱谷浩」「昭14、6、7、夜納入（浜谷氏持参）枚数 6枚」「昭14、6、8朝先生御覽済（市川記）」と書かれたものをはじめとして、いくつかの写真資料についての消息が知れるのである。

〔文中、敬称略〕〔国立民族学博物館教授〕

引用・参考文献

〔1*〕濱谷浩「濱谷浩写真集」1971年7月30日、河出書房新社

なお、濱谷には、河出版行以後から1990年までの20年間にわたる事跡を加筆した、増補版ともいふべき「濱谷浩写真集」1991年2月25日、ちくま書房もある。

〔2*〕財団法人常民文化研究所はその後、神奈川大学日本常民文化研究所に改組、現在に至っている。

〔3*〕濱谷浩「雪国 濱谷浩写真集 カメラ毎日別冊」1956年3月30日、毎日新聞社

〔4*〕洪沢敬三「日本広告史小考」犬彦当棒録——祭魚洞雜録第三——1961年9月10日、角川書店